

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 表 紀 仁

論 文 題 目 Lung-Dominant Connective Tissue Disease
Clinical, Radiologic, and Histologic Features

(肺病変先行型膠原病 臨床、放射線、病理学的な特徴)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

秋山真志



名古屋大学教授

委員

丸山彰一



名古屋大学教授

委員

長尾悦二



名古屋大学教授

指導教授

長谷川好規



論文審査の結果の要旨

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 個別の特異的自己抗体陽性例の治療反応性や予後について

本研究においては、Lung-dominant connective tissue disease(LD-CTD)の診断基準における特異的自己抗体のうちリウマチ因子(RF)、抗核抗体(ANA)、Nucleolar-ANAが陽性である症例が最も多く、それぞれ12例を占めていた。これらの症例とそれ以外の特異的自己抗体が陽性である症例では、RF・ANA・Nucleolar-ANAのいずれにおいても治療反応性や予後に関しては有意な差は認められなかった。また他の自己抗体に関しても少数例ではあるが、同様の結果であった。しかしながら、個々の自己抗体では症例数が少ないため、より多くの症例で検討する必要があると考えられた。

2. 特発性肺線維症(IPF)において、ステロイドや免疫抑制剤が、経過を悪化させることの機序について

過去の研究では、IPFに対してステロイドや免疫抑制剤使用すると入院イベントが増加し、死亡例が増加することが報告されている。この研究ではprednisone 0.5 mg/kg/dayを25週間にわたって投与されており、入院イベントが増加していることから治療に伴う感染症などの有害事象が影響した可能性が考えられる。

3. LD-CTDにおいてUIPパターンが多かった結果の要因について

本研究においては、LD-CTD症例の病理組織型はUIPパターンが25例と最も多くを占めていた。その要因としては、以下のものが考えられる。

- (1) 現行の特発性間質性肺炎(IIPs)のガイドラインにおいては、特異的自己抗体陽性であっても膠原病に特徴的な身体所見を認めない間質性肺炎症例はIIPsと分類される。IIPsにおける病理組織型は、UIPパターンが最も多く占められるため、LD-CTDはIIPsと同様の病理組織パターンを呈することが考えられる。
- (2) 本研究は単一施設の後向き研究であり、外科的肺生検を施行した症例のセレクトションバイアスが存在する可能性がある。つまり、術前にHRCTを用いた画像評価において典型的なNSIPパターンを示し、外科的肺生検を実施しなかった症例が、本研究の対象患者から除外されている可能性がある。
- (3) 本研究では、陽性となった特異的自己抗体においてRFが多く含まれていた。過去の研究では、慢性関節リウマチ(RA)に伴う間質性肺炎ではUIPパターンが多くを占めると報告されている。本研究の対象症例では初診時にRAを発病してはいないものの、RAに特徴的な自己抗体が陽性であることが、UIPパターンが多いという結果につながった可能性がある。

以上の理由により、本研究は博士(医学)の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	表 紀仁
試験担当者	主査		秋山真志	丸山彰一
	指導教授		長谷川好規	

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 個別の特異的自己抗体陽性例の治療反応性や予後について
2. 特発性肺線維症 (IPF) において、ステロイドや免疫抑制剤が、経過を悪化させることの機序について
3. Lung-dominant connective tissue disease において UIP パターンが多かった結果の要因について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、呼吸器内科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。